

土曜日には、七時三十分に二人で起きる。そして犬の散歩に出掛けた。

この季節、奈良公園の山手に目をやると鮮やかな新緑が広がる。公園の池を曲がったところ  
でいつものカレを見かける。

Y売Gツのキャップをかぶり、青白い顔をしながらほうきで道を掃いている五十歳くらいの  
男性。

無表情のカレは僕達を通り過ぎるまで固まったままにいる。微笑むこともなく挨拶する訳で  
もない。きつと心に傷を負っているのだろう。ガラスのように脆く繊細な心を持っていたのだ  
ろう。

だからカレには人に見えない何かが見え、それに傷つけられたに違いない。

僕にはわかる。だつて同じ心を持つているのだから。

「ねえ？ 朝ご飯、コンビニで買っていい？」

サヤカの声が耳に届く。

彼女はどう思っているのだろうか？ サヤカから見てカレはどう映っているのだろうか。

一戸建ての家は三十年のローンを組んで購入した。庭にはコニファーと薔薇が植えてある。五月になると薔薇達は一齐に咲き誇る。紫色やレモン色ととても可憐で芳しい。サヤカと僕は薔薇が大好きである。毎年二人で顔を寄せ合いながら薔薇の香りを楽しんでいく。

二階で電話の鳴る音が聞こえた。恐らく近所に住む母親からだと思つたので僕が受話器をとりに行った。

「おじいちゃんの具合が良くないから、昼からでもこつちに寄つておいで」

そう、八十歳を過ぎた祖父が寝たきりになつてゐるのだ。意識もほとんどない状態に見える。呼びかけても微かに首を動かす程度しかない。

つい五年程前には、ピンピンしてゐたのに。

「はよー、結婚せな。結婚したら下の家もちゃんとせなあかんしー」

こんな話をしてゐたのを思い出す。おじいちゃんは僕を可愛がつてくれたしいつも心配してくれてゐた。

頼もしい存在だったから、余計に今の状態が辛く悲しい。

月曜日の朝は気が重い。いや、すでに日曜日の夜からブルーな気持ちになっている。

K 鉄奈良駅までの出勤途中にいつものカレとすれ違った。今朝は少し暖かかったのでいつもの野球帽はかぶっていないかった。

いつも挨拶をしようかどうか迷うが、以前こちらからの「おはようございます」に何の返答も無かったことが数回続いたりしたので、もう声をかけるまいと自分に言い聞かせる。

今日はゴミの収集日。カレはご近所さんのゴミ袋をあさっていた。いったい何を探しているのだろうか？

カレは僕の視線に気付いたようだった。しかし、顔色一つ変えずに続ける。手には、塵取りとバットを持っている。

「今から、会社かー？」

初めてカレの声を聞いた。唸るような声だった。僕の方を見ながら言っているようだ。はっと我に返り、もう一度彼を見たが先ほどの塵取りとバットはなかった。

新聞を持っていてるだけのようだ。

僕は何がなんだか分からず、そして何も言わずその場を去った。

午後、社員食堂で水気の多い団子状のご飯とBセットを食べていた。無機質で臭い味わいに若干ながらの吐き気をもようしながら、今朝の事を考えていた。

カレは確かにバットを持っていた。そして僕に声をかけた。でも、我に返った時には新聞を持っているだけだった。声をかけたのも事実なのか？

そうだ、最近の僕は疲れているのだ。そう思うことにしよう。

#### #4

夕方帰宅すると、母はパートに行つてまだ帰っていない。

工業高校に通う僕は、自分の部屋に入りガクランを脱ぎ捨てる。次にやることはご飯を炊くこと。母が帰る前に炊いておくことが僕の日課となつている。

それから部屋に戻り、ギターを弾く。夕食を食べる時とお風呂に入っている時、寝ている時以外はギターを弾いている。

中学一年生から始めたエレキギターとハードロックは僕の人生そのもの。FMラジオからはラウドネスやアースシェイカー、そして聖飢魔IIが流れている。

でも最近の僕は、洋楽の方が好きだ。Yngwie MalmsteenやRATTを好んで聴いている。

彼女はいい。かつこつけている訳じゃないけどギターさえあればそれでいい。  
そう、それだけでいい。。。。。

続く